

2013年10月17日／浪宏友ビジネス縁起観塾

理想へ向かって

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「如来神力品」

1. 如来神力品の概要

(1) 地涌の菩薩の誓願

地涌の菩薩（従地涌出品で、大地から出現した菩薩）たちが、教を広める誓いを立てます。

(2) 十大神力

釈迦牟尼世尊と十方の諸仏（見宝塔品で十方から来集なされた無数の仏さま）が、大神力を現します。

(3) 妙法蓮華経の総まとめ

釈迦牟尼世尊が、十大神力を示し、四句要法を説いて、妙法蓮華経の説法の総まとめをします。

(4) 五種法師を薦める

修行者たちに、五種法師の修行を薦めます。

2. 地涌の菩薩の誓願

(1) 地涌の菩薩

見宝塔品で十方から来集なされた無数の仏さまは、それぞれ一人の菩薩を伴っていました。この菩薩たちが従地涌出品の冒頭で立ち上がり、釈迦牟尼世尊が入滅した後、自分たちが娑婆世界にとどまり、妙法蓮華の教を広めましようとして申し出ますと、釈迦牟尼世尊は即座に断りました。

その瞬間、大地に無数の割れ目ができ、そこから、ほとんど仏に近いような貴相をそなえた菩薩たちが、かぞえきれないほど湧きだしてきました。この菩薩たちが、地涌の菩薩です。

地涌の菩薩たちは、如来寿量品第十六から常不軽菩薩品第二十までの間、釈迦牟尼世尊の説法に聞き入っていました。

(2) 誓願

常不軽菩薩品の説法が終わると、地涌の菩薩たちは釈迦牟尼世尊に向かって、次のように誓願しました。

「世尊、わたくしどもは世尊が入滅あそばされましても、この娑婆世界はもとより、世尊の分身のいらっしゃるあらゆる国土において、かならずこの教を説きひろめます。なぜかと申しますと、わたくしどもも、この真実かつ清浄の偉大な教を得ましたうえは、それを受持・読・誦・解説・書写して、その教えのご恩にお報いいたしたいからでございます」（庭野日敬著『法華経の

新しい解釈』p.549)

(3) 十大神力

この誓いをお聞きになった釈迦牟尼世尊は、十大神力を現されます。

3. 前半の五つの神力

妙法蓮華經のこれまでの説法でいろいろな説き方をしてきました。そこで明らかになった真理はつねに一つであること、すなわち「一仏乗」ということを、聴聞の大衆につよく印象づけるために、釈迦牟尼仏をはじめとする諸仏が不思議な神力をあらわされました。

<p>すいこうちょうぜつ 出広長舌</p>	<p>釈迦牟尼世尊を初めとする諸仏が、広く長い舌を出してはるか上空の梵天の世界にまで届かせました。</p>
<p>にもんしんいつ 二門信一</p>	<p>仏さまのお説きくださることはすべて真実であり、その目的は一つであるということ象徴したものです。これは、迹仏も本仏もつまるところは一つであり、われわれが信仰する対象はただひとつであることを意味します。</p>
<p>もうくほうこう 毛孔放光</p>	<p>釈迦牟尼世尊と諸仏が全身から光を放ち、十方世界を照らしました。</p>
<p>にもんりいつ 二門理一</p>	<p>仏さまのお説きくださる教えは、この世のあらゆる生あるものにとって光明であり、迷いの闇を打ち破るものであることを象徴しており、迹門の教えも、本門の教えも、その理は一つであることを意味します。</p> <p>迹門における「ものごとは、原因・条件・結果・影響の原理で動いている」という教えも、本門における「あらゆるものごとはすべて久遠本仏（無始無終の宇宙の大生命）に生かされている」という教えも同じ一つの理にもとづく教えです。</p>
<p>いちじきょうがい 一時警咳</p>	<p>釈迦牟尼世尊と諸仏が舌を納め、一斉に咳払いをなさいました。</p>
<p>にもんきょういつ 二門教一</p>	<p>すべての仏さまの教えは、一つに帰するということの象徴で、三乗即一仏乗を意味します。</p>
<p>くぐたんじ 俱共弾指</p>	<p>釈迦牟尼世尊と諸仏が揃って指を弾きました。</p>
<p>にもんにんいつ 二門人一</p>	<p>「みなと一緒にこの教えを説き広めよう」という仏さまの約束をあらわしたもので、自他一体ということを意味します。</p>
<p>ろくしゅじどう 六種地動</p>	<p>一時警咳と俱共弾指の音が十方世界に響いて、大地が感動に打ち震えました。</p>
<p>にもんきょういつ 二門行一</p>	<p>菩薩行の実践ということを意味します。</p> <p>妙法蓮華の教えに感動した人びとは、自分・自分と接する人々・世間のあらゆる人びとの、よりよき人生・生活のために行動しないではいられないのです。</p>

4. 後半の五つの神力

この世のありかたの究極の理想を示したものです。

理想の世界を建設するために努力するという願いと誓いを込めて「未来」と言っています。

<p>ふげんだいえ 普見大会</p>	<p>大地が六種に打ち震えた世界では、生きとし生けるものが、娑婆世界の釈迦牟尼世尊・多宝如来・十方の諸仏と、そこにいる数知れぬ菩薩たち、弟子たちの姿を見て、喜びにあふれました。</p>
<p>みらいきいつ 未来機一</p>	<p>現在はさまざまな機根（教えを悟る能力）の人びとであっても、未来においては、すべての人が完全に、仏の悟りを得られる機根になるということを意味します</p>
<p>くうちゅうしょうしょう 空中 唱 声</p>	<p>喜びに満ちる人びとに向かって空中から呼びかける声がありました。「娑婆世界では釈迦牟尼世尊が、妙法蓮華・教菩薩法・仏所護念という教えを説いています。皆さん、心から喜んで、釈迦牟尼世尊を供養しましょう。」</p>
<p>みらいきょういつ 未来教 一</p>	<p>法華経の教えこそすべてを救い、生かすものであることを象徴しています。そして、未来において、世界中のすべての宗教が一つの目的に向かって大同団結することを意味します。</p>
<p>かんかい き みょう 咸皆帰命</p>	<p>人びとは空中の声を聞いて、娑婆世界に向かって合掌し「南無釈迦牟尼仏、南無釈迦牟尼仏」と唱えました。</p>
<p>みらい にんいつ 未来人一</p>	<p>未来においてはすべての人が、法華経の教えを信じ、りっぱな人格をそなえるということを意味します。</p>
<p>ようさんしょもつ 遥散諸物</p>	<p>人々は、花や香りや立派な生活用品や宝物などを娑婆世界に向かって送りました。それらが十方から集まる様子はあたかも雲が集まってくるようでした。このようにして集まってきたすべてのものが、一枚の大きく美しい帳（とばり）となって、仏さまたちを覆いました。</p>
<p>みらい ぎょういつ 未来行 一</p>	<p>仏さまに、帰依と感謝のまごころをささげることの象徴です。未来においては、すべての衆生が、仏さまのみ心にかなった行いをするということを意味します。</p>
<p>つういちぶつど 通一仏土</p>	<p>そのとき、十方の世界は区切りがなくなって、一つの世界になりました。</p>
<p>みらいり ひとつ 未来理一</p>	<p>すべての世界が、一続きの仏国土となるということです。世界中が一つの真理に従って、大調和した世界になることを意味します。</p>

5. 四句要法

十大神力をあらわした釈迦牟尼世尊は、さらに、次のようにお説きくださいます。

「法華經の功德の要点をまとめていうならば、

如来の悟った一切の法（如来の一切の所有の法）

如来のもつ自由自在の一切のはたらき（如来の一切の自在の神力）

如来の胸に満ち満ちている一切の重要な教え（如来の一切の秘要の蔵）

如来の一身が経てきた一切の内的・外的な深い経験のすべて（如来の一切の甚深の事）

を、みなこの教えの中でのべ示し、説き明かしてあるのです。」

これを、四句要法（しくようぼう）といい、法華經全体の総まとめであるといえるものです。つまり、法華經のもつ無限の価値、教えとしての完全無欠さが、ここであらためてお釈迦さまご自身のおことばとして、証明されているわけです。（庭野日敬著『法華三部經 各品のあらましと要点』p. 195～196）

6. 付属

(1) 十大神力と四句要法が説かれた理由

ここでしっかりと心に刻みこんでおかねばならない、たいせつなことがあります。それは釈尊が、以上の十大神力を説き示されたり、四句要法として法華經の功德を総まとめしてくださったのは、上行・無辺行・浄行・安立行の四大菩薩を筆頭とする地涌の菩薩たちに、この法華經を弘めるお役を託されるためであったということです。このことを古来、〈結要付属（けつちようふぞく）〉と言います。（同p. 196～197）

(2) 結要付属

付属は頼むことです。結要は要点をまとめることです。そこで「結要付属」は、法華經の要点を頼むこととなります。法華經の要点とは、真理を広めて人々を救うことにほかなりません。

(3) 別付属・総付属

如来神力品では、地涌の菩薩に結要付属しています。これを別付属と言います。

囑累品では、あらゆる菩薩たちに結要付属しています。これを総付属と言います。

(4) 地涌の菩薩とは誰か

地涌の菩薩とは、従地涌出品の冒頭で大地から現れた菩薩たちです。この菩薩たちは、はるかなむかしから久遠本仏である釈迦牟尼世尊の教えを受けて修行してきた本化の菩薩でもあります。

現実問題として、誰が地涌の菩薩なのかと言えば、妙法蓮華の教えを信解して、自分は地涌の菩薩なのだと自覚した人です。自分は地涌の菩薩だと芯から自覚した人は、自ら教えを实践せずにはいられませんし、人びとに教えを伝えないではいけないのです。

7. 即是道場

(1) 修行する場所

結要付属された菩薩たちは、五種法師の修行をしながら、釈迦牟尼世尊から付属された役目をはたすこととなります。

そして、菩薩たちが修行しているところは、そこがどこであっても道場であると言われます。これを「即是道場（そくぜどうじょう）」と言います。

(2) 現代の即是道場

菩薩の修行はどこかの限られた場所で、特殊な方法で行うものではありません。

現代の私たちの場合で考えれば、家庭、職場、社会における日常生活のすべてが、五種法師を行なう場所なのです。ですから、自分がいる場所のすべてがそのまま道場なのです。

8. 真に尊いもの

尊いのは法華経の教えそのものであり、〈教えの実践〉なのです。これらのことは、地涌の菩薩であるわれわれの信仰生活の基本となるたいせつなことからですから、いやが上にもつよく、心に刻みこんでおきたいものです。（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 197）